

筒井康隆と男性性の危機 —『パプリカ』を中心に—

パルマー・セーラ

要旨

This paper examines the relationship between “crises of masculinity” and the works of Japanese science fiction author Tsutsui Yasutaka. It does so through a reading of one of Tsutsui’s most well-known works of science fiction, *Paprika*, as well as supplementary examinations of two of his earlier short stories, “*Jyoken Kokka no Hanei to Houkai*,” (The Prosperity and Collapse of the Women’s Right’s Nation) and “*Kutabare PTA*” (Go to Hell, PTA). After a brief introduction, this paper begins with an outline of previous studies on Tsutsui Yasutaka, stressing the need for a gender-focused reading of SF, particularly one which takes into account the importance of masculinity in the genre. The third section examines the role of “masculinity in crisis” within *Paprika*, arguing that the actions of characters within the story often revolve around preserving traditional, gendered power structures. The fourth section compares *Paprika* with early representations of femininity and masculinity in two of Tsutsui’s short stories, relating them to Tsutsui’s personal experiences of “crises of masculinity.” The final section of this paper uses social and historical context to explain the stark contrast between gendered representations in *Paprika* and earlier works by the same author.

キーワード：筒井康隆，SF，ジェンダー，男性性，男性学，女性性

はじめに

日本のサイエンスフィクションを研究するにあたって、星新一、小松左京と並んで日本 SF の御三家の一人とされる筒井康隆は、その作品の多さと、SF ジャンルへの影響、SF 業界の中での重要な立ち位置を考えれば、検討すべき作家である。しかし、日本 SF を論じるうえで欠かせない重要な作家であるにもかかわらずジェンダーの視点から注目されてこなかった。その理由の一つは、筒井がフェミニズムなどの女性運動に反対する声を大きくあげた一員であり、次の節で論じるように、SF 作家の中でもジェンダーの観点から取り上げにくい作家であることが考えられる。

本論文は、作品内外において筒井康隆とジェンダー、特に男性性との関係を明らかにしようとするものである。そのために、筒井のジェンダー観が特に表れていると考えら

れる代表作の『パブリカ』(1993)を中心に、初期作品「女権国家の繁栄と崩壊」(1970)と「くたばれ PTA」(1966)を、作家のエッセイや個人的な経験と関連させながら論じる。

本論文は以下、4 節で構成されている。第 1 節では、数少ないながらも行われてきた筒井康隆作品とジェンダーに関する先行研究をまとめて、筒井の作品をジェンダーの視点から論じる必要性について述べる。第 2 節では、『パブリカ』において、男性性の危機という主題が重要であり、女性の主人公が男性性の危機を解消する「強調的な女性性」を持っている存在として描かれていることを明らかにする。第 3 節では、筒井本人の男性性としての経験と、初期作品「女権国家の繁栄と崩壊」「くたばれ PTA」に見られる女性性と男性性との関係を検討する。第 4 節では、初期作品と『パブリカ』のそれぞれの女性の描写と男性性との関係を、それぞれの作品が執筆された社会状況を背景に考察する。最後に前節までの主張をまとめたうえで、本論文では検討できなかった、これからの筒井研究の方向性を示す。

本論文の第 3・4 節において筒井自身の人生経験と作品が執筆された社会状況に注目する理由は、本論文が日本の SF 作品とそれを生産するコミュニティのジェンダー化との関係を理解しようとする、より大きな試みの一部だからである。SF ジャンルにおいては、作品分析とともに、その作品を生み出している SF コミュニティを論じることが不可避である。実際に、1960 年代から 1980 年代までに、日本の SF 作家と編集者、ファンが親密な関係にあったことが、誰が SF 作品を雑誌に発表できるのか、また発表されるその作品の内容にまで影響を与えた。特に、筒井康隆は SF コミュニティの中で中心的なメンバーであったため、コミュニティのジェンダー化を理解するには、筒井自身のジェンダー観を検討する必要がある。また、筒井が作品を超えて、エッセイやファンとのやり取りを通して、公式なペルソナを戦略的に作っていたため、作品内の描写のみならず、作家自身に目を向ける必要がある。したがって、本論文は、筒井康隆の作品におけるジェンダー描写の単なる分析に留まらず、筒井の作品とエッセイを通して、作家のジェンダーに関する考え方を検討する。

1. 筒井康隆とジェンダー

純文学と比べて SF 小説を取り上げる研究は全体的に少ないながらも、筒井作品に関する先行研究及び批評は他の SF 作品と比較すると数多く蓄積されている。筒井の作品を取り上げている研究もあれば、アニメ化や映画化、ドラマ化された数多くのアダプテーションを考察している研究もある¹。筒井の小説に関する研究の多くは、筒井自身のメディアや社会への反発や 1993 年のいわゆる「断筆宣言」に注目している²。例えば藤田直哉は、筒井の作品には政治体制への批判は直接表面化していないながらも、スラプスティックやパロディを利用した社会批判として読めるという、筒井の「武器としての笑い」(藤田、2013、41-71)について論じている。また、横尾和博は断筆宣言を取り上げ

て、表現の自由と差別は不可欠なものであると主張し、筒井康隆を表現の自由の代表的な擁護者であるかのように記述している(横尾、1994)。ここで注目すべきは、筒井作品に関する研究・批評の多くは、作品分析のみならず、筒井作品や筒井本人が論者自身にいかなる影響を与えたのかまで論じているものや、筒井を一方的に評価し、作品の弱点に注目していないという点である。つまり筒井作品に関する研究・批評の多くは、彼のファンによる批評だと言える。

八橋一郎の『評伝 筒井康隆』の帯文は、「これは評伝なのだから事実だけ追えばいいのだ、とそう割り切って出発したのだが、いつのまにか筒井康隆の作品世界に取り込まれて、虚構の面白さの追跡者になってしまった」(八橋、1985)と、筒井に関する研究・批評とファンによる「追跡」との境界線が曖昧であるということを示唆している。文学研究あるいは批評を行う際に、「虚構の面白さ」を感じさせてくれる作家や作品を取り上げることは対象選択の一つとして一般的ではあるものの、ファンとしての立場が、その作家と作品の十分な分析や批評を妨げる可能性もあると考えられる。

筒井に関する研究・批評の全体的な量から考えれば、ジェンダーの視点から筒井の作品を分析する研究もあってしかるべきであるが、実際には、筒井作品のジェンダー研究はほとんど見当たらない。ジェンダーについて触れている研究であっても、言及が短く、分析に至っているとはいえない。清水良典によれば、「筒井の作品は一貫してセクシズムや強姦願望を露骨に書く」(清水、1997、157)ものである。小谷野敦は清水の主張に言及して、筒井が露骨な「セクシズム」を表出した作品を書くからこそ、評論家や研究者は「筒井を無視したがる」(小谷野、2003、69)と指摘している。しかし小谷野もまた、「一九三〇年代生まれの者の女性観を現代のフェミニスト様式に変えることなど、成島柳北をして明治の時勢に順応させるのと同じくらい無理な話」(小谷野、2003、69)として筒井の生まれた時代を理由にして、自らも筒井作品のセクシズムを迂回してしまうのである。このように、筒井作品におけるジェンダーの問題に触れている研究者や批評家は、批判すべき箇所を意識化しているものの、その意味について深く検討せず、最終的に問題化すべき描写を等閑に付してしまうことが多い。

SF とジェンダーの関係について長年研究している小谷真理でさえ、筒井作品とジェンダーの関連性に焦点化した研究を発表していない。小谷は SF・ファンタジーとジェンダーとの関わりについて、とりわけ SF と女性の交錯について女性の空間という論点を軸として考察してきた。例えば、鈴木いづみの「女と女の世の中」を取り上げて、本作品が、男性のいない、女性のためのユートピアを描いていると指摘している。また、松尾由美の『パルーン・タウンの殺人』については、妊婦のみの町を描写することで、松尾が作品内で女性の身体のあらゆるありようが認められている世界を作り上げていると主張している (Kotani、2002、397-417)。作内の女性表象に焦点を当てたうえで女性だけが存在しうる空間を肯定的に読むという小谷の手法は筒井作品に適用することはできない。

小谷による筒井作品の研究及び評論は、1998 年 4 月号の『すばる』に掲載された『敵』(1998) の評論しか見当たらないが、この評論において小谷は『敵』を「傑作」と呼び、「おんぶにだっこの日本人男性」になかなかいい、「妻なしでもきちんと生活できている」(小谷、1998、416) 主人公を描いたと筒井を称賛しつつ、それまでの筒井のセクシズムやミソジニーの問題を回避してしまう。

このように、筒井作品に関する国内の研究・評論は、ジェンダーを完全に無視している論と、セクシズムに言及しながらも表現の自由の問題へと移行してしまったり、作家が生まれた時代性に還元して問題化しなかったりする論しか見当たらない。その理由としては、ジェンダー研究を女性学と等置する傾向が研究領域にあるからだと考えられる。このような筒井作品に見られる「セクシズム」と、筒井本人がフェミニズムやウーマンズ・リブ運動を率直に批判しており、その批判が作品にも明らかに表れていることを考えれば、筒井作品における女性表象を肯定的に分析するという枠組みの中で、筒井康隆の小説は論じにくいかもしれない。しかし、ジェンダーを論じることがすなわち女性を論じることだという認識は、「男性性」を自然なものとして強調させ、その社会的構築性を見落としてしまうのではないか。

スーザン・J・ネイピアは、筒井作品と男性性に着目した研究者の一人である。ネイピアは、先に言及した批評家や小谷のような日本の SF 研究者とは異なり、日本の批評界あるいは SF 業界から離れた立ち位置にいるからこそ筒井作品のセクシズムを批判し、ジェンダー表象を十分に指摘できるのだと思われる。ネイピアによれば、筒井は女性を暴力的かつ否定的に描くことが多いという(Napier、1996、90-91)。また、「ポルノ惑星のサルモネラ人間」(1982) の簡潔かつ鋭敏な分析において、「女性の性的な部位を絶えず連想させる」「半狂乱的に性的な背景」が描かれていながら、「実際には女性の登場人物がいない」ことを指摘している。ネイピアはこれを作品内の「女性の拒絶、または少なくとも女性の母性的・性的な機能の拒絶」という中心的な枠組みと関連づけて解釈している(Napier、1996、68-69)。

ネイピアが指摘するように、筒井の作品に女性の欠如あるいは女性の「拒絶」が見られるのであれば、ジェンダーの視点から作品を分析する際には、女性や女性性よりもむしろ、男性や男性性に目を向けるべきではないだろうか。既述の通り、ジェンダー研究、特にジェンダーを取り上げている日本国内の SF 研究において、女性と女性性に焦点を当てて分析する傾向がある。しかし、「男性」と「男性性」を、「女性」と「女性性」と同様に、有標かつ構築されたものとして認識したうえで、SF というジャンルを、とりわけ SF 作家として影響力を持つ筒井康隆のありようを再検討すべきではないだろうか。

実際に筒井康隆の作品は、ジェンダー分析、特に男性性を取り上げる研究にはふさわしい対象であると言える。近年のマスキュリティスタディーズに大きく貢献している R.W.コンネルは、代表作 *Masculinities* において、男性性を科学的に分析しようとした分

野を3つあげており、その一つめは19世紀末から20世紀初めのフロイトによる精神分析学に端を発した心理学である。コンネルによれば、フロイトが初めて「一見したところ自然な『男性性』という対象を崩壊させ、それがいかに形成されているかという問いを可能にすると同時に、ある意味でその問いを不可欠なものにしたのである。」(コンネル、2022、10)。フロイトの精神分析、特に男性器をジェンダーの出発点として措定する見方は長年にわたってフェミニズムやクイア理論によって批判されているが、さまざまな分野におけるジェンダーに関連する主題、特に男性性に関するディスコースは、確かにフロイトの精神分析や心理学の知見に基づいている。そして、筒井康隆もまた精神分析と心理学の影響を強く受けている。筒井は大学で精神分析について勉強し、シュールレアリズムと精神分析の関係について卒業論文を執筆した(藤田、2013、47)。筒井のSF作品の中にも、精神分析と心理学の影響が窺える。例えば、筒井の代表作の一つである『家族八景』(1971)は、生得的に心理感応の才能を有している少女、火田七瀬と、彼女が住み込み家政婦として働いている家庭の数々を描いている。七瀬がさまざまな家庭内の人物の精神状態を観察し、その内面に隠されている苦悩や意志、欲望などを読者に提示していく。さらに精神分析の影響が色濃く表れているのは、次節で取り上げる、筒井のもう一つのSF代表作『パブリカ』である。このように、筒井の作品は精神分析の影響を考慮すれば、ジェンダー分析に恰好の素材であるだけでなく、男性性を理解するための鍵を与えてくれる作品であるといえよう。

筒井康隆の作品がジェンダー分析にふさわしいといえるもう一つの理由は、主人公の設定である。ネイピアが指摘した通り、女性の拒絶が見られながら、その一方では筒井作品が日本のSFではきわめて珍しく多くの女性主人公を描いている点はすでに注目されている(筒井、1986、262-263)。無論、作品のジェンダー表象を分析するためには女性が必ずしも必要であるというわけではない。ジェンダー研究は女性のみならず、男性と、社会的に構築された男性性に批評的な視線を向けるべきだというのは先ほど論じたとおりである。しかし、他のSFの男性作家の多くが女性の主人公を限定的にしか描かないのにもかかわらず、筒井があえて女性を頻繁に主人公として描いているということは、筒井が作品内でジェンダーを意識している証左だと考えられる。

筒井作品の中に、ある特定の形で女性性と男性性が表れており、それらがわれわれのジェンダー体制の一端を明らかにしてくれることだろう。したがって、本論文では、筒井の作品の中で女性に対して暴力的だと思われる表現を指摘しながら、日本のSF作家の中でも特有だと思われる筒井作品の男性性との関連で女性に対する暴力性の意味を追究し、さらに、男性性が筒井自身の経験及び作品が執筆された時代の社会状況との関連においていかに構築されているのかを検討する。

3. 『パプリカ』における男性性の危機

前節で述べたように、筒井のさまざまな作品は精神分析とそれに基づいたジェンダー観から強い影響を受けている。筒井の数多くの作品の中でもこの影響が特に窺えるのは、代表作の『パプリカ』である。『パプリカ』は1991年から1993年にかけて女性誌『マリ・クレール』に掲載された長編小説で、主人公は、精神医療学者の千葉敦子博士である。敦子は日中、精神医療研究所に勤めているが、夜になると「パプリカ」という分身に変身し、最新の精神治療技術を用いて、精神病を抱えている社会の上流人士の夢に入り込み、その夢の意味を分析して病を完治させる。作品の冒頭で、同じ精神医学研究所に勤めており、敦子が想いを寄せている「百キロ以上」の体重を持つとされる天才研究者、時田浩作が、「DC ミニ」という新しい精神医療技術を発明する。「DC ミニ」は小さな機械であり、頭部に接着すれば誰の夢にでも突入することができ、本来夢にしか存在しないはずの幻想を現実の世界に実現させたり、時空を超えたりすることができる。「DC ミニ」が発明された直後、研究所に所属する敦子と時田のライバルたちに盗まれたため、千葉敦子/「パプリカ」は、時田浩作や、敦子が過去に完治した男性たちと、夢の世界で戦うことになる。

まずは『パプリカ』の中でジェンダーという問題と最も意識的に向き合っている場面を考察しよう。この小説において、敦子が初めて診察する患者は、研究所長が紹介した自動車メーカーの重役で54歳の能勢龍夫である。能勢は不安神経症を抱えており、その原因は幼児期の経験にあると仮定されている。敦子はパプリカに変身して彼の夢を録画し、夢の風景を精神分析を援用して分析する。以下に引用するのは、分析に当たる能勢と敦子の二人の会話である。なお、引用部に登場する難波という人物は能勢の気難しい部下であり、虎竹とは過去に自殺した能勢の幼馴染である。

「男性の夢の中に出てくる見知らぬ女性を、ユングは『アニマ』って言ってるわ」
「それは何だい」

「男性の中にある女性の遺伝原質なの。女性の夢の中に出てくる男性は『アニムス』」

「でも君に似ていたよ」

パプリカが初めて顔を赤くした。彼女は少し怒った口調で言った。「会ったばかりのわたしの印象をたまたまアニマに取り入れただけでしょ。昼間の残滓というほどのものですら、ないわ」

「してみれば」能勢はさりげなくパプリカの視線をかわした。「アニマというのがぼく自身、またはぼくの中で理想化されている女性であるとすれば、さっきの夢は難波が死ぬのではないかと恐れているぼくの、女性的な気遣いだってことになるのかい」(筒井、1993、52) [・・・]

「あなたは虎竹くんへの愛を抑圧したんだわ」パプリカは立ち上がり、ベーコン・エッグの皿などを片づけはじめながら言った。それは能勢に衝撃を与えまいとするさりげなさを装うためのようでもあった。「難波さんへの愛を抑圧するために。そうした概念が抑圧された場合、その情動のエネルギー量が不安に変わるの」

「情動だって」能勢は瞬間、めまいに襲われた。「つまりその、同性愛的な」

「あら。そんなもの、誰にだってあるわよ」平然としてパプリカは言った。「コーヒー、もっとどう」

黙りこんでしまった能勢の哑然とした表情を見て、パプリカは初めて性教育をされたばかりのわが子を見る母親のように笑った。「おやおやまあ。ずいぶんショックだったみたいね。でも今のはフロイト的な解釈。不安神経症の原因はそれだけじゃないのよ。(筒井、1993、146-148)

以上の引用で筒井は、アニマとアニムスの概念を挿入することでジェンダーの複雑性を暗示し、パプリカが能勢に内在する「同性愛的」な性欲望について「そんなもの、誰にだってあるわよ」と発言させることで、一見してセクシュアリティの複雑性を認めているかのようにも思われる。しかし、作内の男性性の表象を理解するには、登場人物がいかに振る舞い、またどのように描写されているのかを検討する方が重要であると考えられる。パプリカが能勢に「女性の遺伝原質」が彼に内在していると伝えたとき、能勢は「でも君に似ていたよ」と多少の抵抗を示す。この抵抗が、本論が話題にしている男性性の危機というものを表していると考えられる。

R. W. コンネルは1987年の *Gender and Power* において、ドイツの哲学者であるユルゲン・ハーバーマスの「正統化の危機」という概念を参考にし、ジェンダー体制に危機的な傾向があると主張している (Connell, 1987, 158-163)。コンネルはこの概念を以下のように説明している。「男性が女性を支配するジェンダー体制は、必ず男性を利害関係にある集団としてそのシステムを守る側、女性を利益関係にある集団としてそのシステムを変えようとする側として構築する」 (Connell, 2005, 82)。ジェンダー体制を守ろうとする男性と、変えようとする女性との衝突において、特に社会的なジェンダー役割に変化があった時に、危機が発生する。このようにシステム自体が危機的な傾向を内在させているのだが、システム内に生きる人々も、特にそのシステムによって権力を持つことが正統とされた男性は、危機感を抱くのである。男性を権力的な立場に置くこのシステムの正統性が問題化された時にシステムに危機が生じ、体制の中で権力を持つ男性が自らの権力を失いそうになった時に彼らの中に危機感が生じる。

また、コンネルを含めて、多くのジェンダーの研究者は、男女の相補性に注目している。ジェンダーの二分法という枠組みの中では、女性性と男性性が相補的に位置付けられているため、一つは、もう一方なしには存在しえない (Connell, 2005, 68)。この二つ

の概念が二分法の中で相補的なものとして構築されている上、女性性は男性性に対して、男性性は女性性に対して互いに排除しあう機能を持っている。つまり、男性と思われる存在に「女性的」な要素が認められる場合、その男性性が否定されるのである。

そうすれば、上の引用における能勢の抵抗は、自らの中に女性性が内在していると指摘されたことで、権力の正当性を保証する男性性が否定されたことによる危機的な反応だと考えられる。ティム・エドワーズは、危機感という概念を発展させて、「男性性とは、危機的状況にあるのではなく、危機そのものである」(Edwards, 2006, 17)と主張している。つまり、ジェンダー体制の中で男性が権力を守らなければならないという危機感は、社会のジェンダー化された権力関係を守ろうとする機能のみならず、男性個人の男性性と不可分な関係にあり、男性性の一つの条件なのである。

次に、能勢が感じている男性性の危機に対するパプリカの行為を検討しよう。パプリカは「顔を赤くし」、「少し怒った口調」で、自らの存在が「昼間の残滓というほどのものですら、ないわ」という。パプリカのこのセリフは、恋愛や性を含意する表現であると考えられる。この場面では、パプリカは確かに、能勢に性的興味を抱き始めているように描写されており、能勢が直面している男性性の危機に関連して重要な機能を果たしている。女性の欲望の対象になることは、理想化された男性性の一つの条件であるため、特にパプリカのように「キュートな顔立ちをしている魅力的」な存在として肯定的に描かれる女性から好意を寄せられることは、能勢の男性性を肯定する効果があると思われる。したがって、パプリカのセリフは、能勢に「女性的」な要素が内在していることが彼に及ぼす男性性の危機を解消する機能を持っていると言えるだろう。

能勢が男性性に危機を感じた時、パプリカが彼の男性性を肯定して危機を和らげるというパターンは、二人の話題がジェンダーからセクシュアリティに展開していく時にさらに明瞭になる。能勢は、自らに同性愛的な欲望があると言われた時に、「めまいに襲われ」、「ずいぶんショックだった」。能勢が感じるこのショックは、単に彼が自らのセクシュアリティの新たな側面を発見したこと由来する驚きではない。同性愛的な欲望だからこそ、能勢はショックを受けたのである。なぜなら、社会的に構築された男性性の一つの条件は異性愛であり、同性愛は男性性という覇権的枠組みを攪乱するからである(Edwards, 2006, 79)。自らに同性愛的な欲望が存在することに対する能勢の驚きは、自らの男性性が危機に晒されていることへの情動化された反応だと考えられる。

パプリカは能勢が抱く強い危機感を察知し、再度その危機感を緩和するために行動する。能勢の同性愛的な欲望を暴露することが、衝撃を与えることでであると彼女は十分に理解し、その衝撃を和らげるために、「ベーコン・エッグの皿などを片づけはじめながら」暴き立てる。次に「でも今のはフロイト的な解釈。不安神経症の原因はそれだけじゃないのよ」と、彼の精神疾患に同性愛以外の要因があると能勢を安心させる。つまり、この場面においてパプリカは、自らの男性性の危機を感じている能勢を落ち着かせ、彼の

男性性を守ろうとしているのである。この会話に見られる能勢とパプリカの相互作用から、男性性の危機という概念が共通していることがわかる。女性性や同性愛によって攪乱される男性性は、能勢の意識にのみ存在する概念ではなく、二人に共通している概念であるからこそ、以上の引用のようなやりとりが可能となる。

実は、パプリカに見られるこのような男性性の危機を解消する振る舞いは、男性学で近年注目されている「強調された女性性」という現象にとっても類似している。平山亮が指摘する通り、強調された女性性という訳³は、『女らしさ』をアピールするということ」や、「規範的な女性性を体現すること」という意味にとられ、「誤解を招く可能性がある」が、その本来の意味は、父権社会の「正当化に利用される女性像」である（平山、2019、49）。つまり、「強調された女性性」は伝統的なジェンダー的権力関係を維持させる女性性であると考えられる。上の場面で、権力の正当性を保証する能勢の男性性が否定され、能勢が危機を感じた時に、パプリカは「顔を赤くし」て「母親のように笑」い、自らの女性性を利用して、能勢のその危機感を解消しようとする。このパプリカの行動は、男女の権力関係を再正当化している彼女の強調された女性性に帰された行動だと考えられる。

では、能勢の男性性の危機を和らげるというパプリカの強調された女性性的な振る舞いが本作品に偏在していることを確認しよう。パプリカは、以上に引用した場面だけではなく、小説のさまざまな場面において男性性を保護・維持する役割を果たしている。例えば、以下に引用する、六本木のバーでパプリカと能勢が初めて会う場面を取り上げてみよう。

今後能勢がパプリカと呼ぶことになるその少女は、眼の周囲にソバカスがあり、キュートな顔立ちをしていて魅力的だった。[・・・] 息子とどちらが歳上だろうなどと思いながら能勢は、しきりに店内を見まわしている娘に声をかけた。「ええと。お嬢さんは」

「パプリカって言って」彼女はやや蓮っ葉にそう言った。

能勢が「パプリカ」と呼びやすいようにわざとそんな言いかたをしたのだったらいい。能勢の口からはすなおに「パプリカ」ということばが出た。[・・・]

「能勢さんって、無公害車の開発なさってるんですってね。そのお話うかがいたいわ」

くだけた喋りかたではあるが、消して無礼ではない。とびきり頭がいいに違いないぞ、と、能勢は思った。少し頼りなげな様子も、能勢が話しやすいようにと考えてのことらしく能勢には思えた。（筒井、1993、32-34）

ここでパプリカは「能勢が話しやすいように」「蓮っ葉に」話し、「無礼ではない」なが

らも「くだけた喋りかた」をする。これは先述した男性性の危機を解消するための行為だといえる。あらゆる場面で不安や緊張を感じるということは、男性性を否定する可能性がある。パブリカは能勢を落ち着かせて話しやすい雰囲気を作ることで、彼の男性としての権力的な立場を維持するのである。また、男性を落ち着かせる振る舞いができるパブリカは、能勢に「とびきり頭がいい」と認識されている。つまり、パブリカは能勢と自分の間のジェンダー的権力関係を理解しつつも、それに抵抗せず、権力関係の中でうまく振る舞っていることが能勢によって肯定的に評価されているのである。

パブリカが男性性を担保することに見られる強調された女性性の描写は、筒井康隆自身の男性としての経験と関係があると考えられる。次節では、筒井の男性としての経験とその初期作品とを照らし合わせて、両者の関係性を検討する。

4. 筒井康隆とその初期作品における男性性の危機

八橋一郎は『評伝 筒井康隆』で「筒井康隆の女性の描き方には、二つのタイプがある」（八橋、1985、164）と書いている。八橋が挙げる二つのタイプとは、読者が同情できる「感動的」な女性と、「サディスティック」な女性である。前節で取り上げた『パブリカ』の主人公である千葉敦子/パブリカは「感動的」な女性として描写されていると仮定できるが、八橋がいう「サディスティック」な女性とはどのような女性で、どのように描写されているのだろうか。筒井康隆ファンクラブの会長を務めていた経験のある幸森軍也は、1986年に出版された『くたばれPTA』という短編集の解説で、「女権国家の繁栄と崩壊」（1970）で描かれる女性は「サディスティック」な女性であると論じている。したがって、この作品を議論の出発点とする。

この短編小説では、日本中の女性たちが「男権政府」を倒して、女性の手で女性の権利を優先する「女権社会」を作り上げる。政府を再構成して権力者の側に回った女性代表者たちは、作品内で以下のように描写されている。

「そこで問題になるのは、男子に参政権をあたえるかどうかってことなんですけど」と議長がいった。[・・・]

「あら、それくらいは、あたえてやっていいんじゃないかと思うんですけど」と、法務大臣がいった。[・・・]「男権社会でも、婦人参政権はあったのですから」

「だから考えが甘いちうとるんだ」革命の総指揮者だった総理が一喝した。「あの婦人参政権を獲得するまでに、どれだけ女性がつらい目にあってきたことか。男どもにも、そのつらさを味あわせてやらなきゃならん。もっともっと、いじめていじめて、いじめ抜いてやるんじゃ」（154）

上の引用では、女性が男性を「いじめたい」という欲望が明らかに表れているため、この女性たちには確かに「サディスティック」な側面があると言えるだろう。幸森軍也は、「女権国家の繁栄と崩壊」における女性の「サディスティック」な描かれ方は筒井が高校時代に女子生徒にいじめられたことに原因があると述べている（筒井、1986、264）。

筒井自身は、自伝的エッセイで高校時代のいじめの経験を次のように振り返っている。

おれの高校は前身が女学校だったから女子生徒の力が強く、何度これをやられたかわからない。[・・・] 階段の踊り場の隅に数人で追い詰められ、あることないこと罵倒された悪夢のような体験は前後六、七回に及ぶ。（筒井、1994、271-272）。

ここで筒井が述懐している女子生徒によるいじめは、その経験と類似する内容が作品にも表れているため、確かに筒井の女性の描き方に影響を及ぼしていると言えるだろう。例えば、同じく短編である「くたばれ PTA」（1966）を事例として取り上げよう。本作品では、SF 漫画を書いている漫画家が、PTA の母親たちの悪書追放の標的となり、活動中止を要求される。漫画家が要求に応じなかったため、PTA 代表がテレビなどのメディアに出演して彼の漫画がいかに子どもの教育に悪影響を与えるのかを訴え、最終的に漫画家の仕事場にまで訪れ、直接的に彼に説教する。漫画家の秘書も、悪書追放の運動によって「泣きそうに」なるまで「苛められている」（筒井、1986、172）。

以上の「くたばれ PTA」の筋立ては、女性たちによる責め立てと筒井が語る自らのいじめの経験との類似点が窺えるだろう。幸森軍也によれば、女子生徒のいじめを受けたことで、筒井は「女性に対する恐怖、憎悪、蔑視、不審」を抱くようになった（幸森、1986、264）。しかし、「くたばれ PTA」に見られるジェンダー表象は筒井の女性嫌悪の単なる反映として簡単に片付けることはできない。女性によるいじめが女性嫌悪を喚起したという説明とは異なるもう一つの解釈の可能性、すなわち筒井が内面化した男性性が彼の初期作品の女性の描写に結実している可能性について考えなければならない。

以上で説明した筒井による女性の「サディスティック」な描写については、女性が集団として描かれるほどに、そのサディスティックな側面が強調されるということがすでに指摘されている（幸森、1986、263）。いじめの経験に関する筒井自身の語りの中でも、「数人で追い詰められ」たことが強調されている。同様に、「女権国家の繁栄と崩壊」に登場する女性たちは「ウーマンズ・リブ」運動の担い手となった女性たちのパロディとして描写されているため、集団の要素が含まれている。そして「くたばれ PTA」の母親たちも PTA という学校組織に所属しているのである。

社会的なジェンダー体制は、男性を権力的な立場、女性を権力へのアクセスが遮断された立場にそれぞれ位置付けているが、女性が集団化した場合、権力関係が転覆される可能性が生じる。筒井の女子生徒によるいじめの経験と初期作品には、女性の集団化に

よって権力関係が一時的に逆転している様子が見られる。この権力関係の転覆が、筒井に男性性の危機を感知させていると考えられる。しかし、筒井の実体験と「女権国家の繁栄と崩壊」や「くたばれ PTA」をはじめとする初期作品には、パプリカのような、男性性の危機を和らげる人物は登場しない。そのために筒井は自身で自らの男性性の危機を解消せざるをえない。では、危機感の解消はいかにして行われるかについて検討しよう。

ここで、先に取り上げた筒井のエッセイに戻ろう。自身が女子生徒にいじめられた理由について、筒井は以下のように述べている。

さんざん女性からいやな目にあわせられたため、すっかり女嫌いになったおれの経験で言うと、まず女性というのは第一に、自分を相手にしてくれない男性や、交際をことわられた男性に対して腹を立て、この手のいやがらせをする。おれなど何度やられたことかわからない。適当につきあっておいてやればいいじゃないかと思われるかもしれないが、一緒に並んで歩くのもいやというひどい女の場合が多いから、迷惑、困惑、この上もないのである。(筒井、1994、271)

このように、筒井は高校時代に女子生徒にいじめられた理由として自らの男性としての魅力を挙げている。自分を魅力ある男性として構築することで、一時的に女子生徒たちに権力を奪われ危機に晒された男性性を回復させようとしているのである。

類似した言説戦略が筒井の初期作品にも見られる。以下に引用するのは、「くたばれ PTA」において、漫画家の主人公と PTA 代表の女性が出会った場面である。

その通り、この女はさっきから、同じせりふばかり四、五回くり返していた。おれが昔、あまりヒステリックなので恐れをなして捨てた女に似ていた。この女がおれを見る眼つきには憎悪が込められていたから、ひょっとするとこの女も昔、おれに似た男に捨てられた経験があったのかもしれない。(筒井、1986、173)

漫画家によれば、PTA の女性の怒りは、自分の SF 漫画が子どもに悪影響を与えることに向けられたものではなく、実際には以前自分に似た男性に拒絶された経験に基づいている。すなわち漫画家はここで女性から求められる立場に男性を位置づけ、男性を求める立場に女性を位置付けることで、PTA の女性たちの活動によって揺るがされたジェンダー・権力体制を再強化しているのである。

この意味では、幸森軍也が指摘するように、筒井康隆の作品における女性の描写は、確かに女性によるいじめの経験に基づいている。しかし、作家自身の経験と作品の描写との関係は、「さんざん女性からいやな目にあわせられたため、すっかり女嫌いになった」

作者のミソジニーの表出として単純化することはできない。いじめの経験を振り返るエッセイにも経験が土台となった作品にも、倒れそうな状態にある男性性をなんとか支えようとする言い訳が後付けされていることを考えれば、筒井は自らの経験を、男性性を脅かさない形で書き換えようとしているように思われる。言い換えれば、筒井はエッセイや作品を執筆する過程で女性によるいじめの経験を追経験している。いじめの追体験と執筆作業を同時並行で遂行しつつ、体験の書き換えによって、筒井は同時に男性性を再確立し、男性性の危機を解消していると思われる。

5. 『パプリカ』と初期作品の差異について

本論はここまで、「サディスティック」な女性を描いた「くたばれPTA」と「女権国家の繁栄と崩壊」と、経済的・社会的自由を享受する科学者である女性を主人公として描いた『パプリカ』という2つの異なる系統にある作品を論じてきた。これらの作品の女性表象になぜこれほどまでに違いが生じているのかについて考える時、注目すべきは各作品の出版社と出版時期の社会背景、及び筒井康隆個人の当時の経験である。そして無論、男性性の危機との関係も重要な論点となる。

「くたばれPTA」は1966年に、「女権国家の繁栄と崩壊」は1970年に出版された作品であり、先に論じたように、女性によって自身の権力と男性性を傷つけられた経験がある筒井が、男性性を再活性化するために執筆した、ある意味でのセラピーの役割を持った作品として読むことができる。この二つの作品は筒井の短編集に収録されたものであり、男性の読者を想定して書かれたものである。この二作が執筆された1960年代の生活について、筒井が以下のように語っている。

この時期がぼくの人生でもっとも狂躁的な、文字通り踊り狂っていた時期だからであって、読者諸君にその当時のぼくののぼせ具合、馬鹿さ加減をお眼にかけ笑っていただこうと意図するからだ。(中略)

これはそののち、結婚し、妻と上京し、少し金を貯め、三年ほど住んだ原宿駅前のアパートをひきはらって青山通りに近い神宮三丁目の建て売り住宅に住んだばかりの頃のことである。

このころ、原稿の依頼はぼつぼつ多くなりはじめていたが、まだまだ書きたいものだけ書いていて生活できるといった状態にはほど遠く、気の進まぬ仕事もずいぶん引き受けている。原稿料もおそろしく安かった。(筒井、1986、261-262)

「読者諸君」という言葉が示唆しているように、筒井は自らの作品の読者を男性と想定している。さらに、「くたばれPTA」が『MEN'S CLUB』という男性向けファッション・エンターテインメント雑誌に掲載されたことがその読者層を強調している。しかしこ

でさらに注目したいのは、この時代における筒井の経済的状況である。1965年に結婚し、筒井は家族を持つ成人男性が有すべき経済力を期待され、家族の責任を背負った。同時に、住み慣れた大阪から東京へと転居し、表参道という東京の瀟洒な街に住み始めたことが、金銭面でさらなる圧力となっていただろう。しかし、筒井が自ら語るように「書きたいものだけ書いて生活できるといった状態」ではなかったうえに、「原稿料もおそろしく安かった」。

労働及び経済力と男性性との関係は、男性学において多く語られている問題である。例えば、「現代日本の男性学の方角性を」示すと指摘されている（渋谷、2001、452）伊藤公雄は『男性学入門』において、「男たるもの仕事ができるこそ、一人前だ」という風潮に見られる『男は仕事』という、現代日本の男性文化は、男性の過労死率や中年自殺率の高さと関係があると指摘している（伊藤、1996、47）。つまり、仕事をすることや家族を支える経済力が、男性性の一つの条件であると考えられており、稼ぎ手という役割を果たさなければならないという社会的意識が男性に大きな圧力をかけている。結婚し専業作家として活動を開始したばかりの筒井の「原稿料もおそろしく安かった」という一言には、このような圧力が感じ取れる。このような経済的な芳しくない状況が筒井の男性性に、高校時代とはまた異なる危機感をもたらしたと考えられる。新たな男性性の危機を感じながら、筒井は過去の男性性の危機を解消しようとする作品を描いたといえる。

経済的な苦境に立たされていた時期を乗り越えた筒井は、1971年に純文学作品の発表の場となっていた文芸誌『海』に連載をはじめ、その後『海』編集長の埴嘉彦と親しくなり、純文学作品も手がけるようになった。1985年に『海』が終刊を迎えたのを機に、『海』の編集者であった安原顯が『マリ・クレール』に異動し、すぐに副編集長の座についた。『マリ・クレール』は、「フランスでは“女性のバイブル”と呼ばれ、創刊当初から『上質で妥協のない、美の追求。ファッションを一過性の流行ではなく、文化の域へ』というミッションを掲げている（『マリ・クレール』ウェブサイト「マリ・クレールとは」）女性向けファッション誌であり、安原が副編集長になって以来、そのミッションが実現されていった。安原は『海』に作品を掲載していた作家に対して『マリ・クレール』への掲載を呼びかけ、瀟洒な文芸雑誌へと転換していくことで、経済的な不振に陥っていた『マリ・クレール』の売れ上げの増加を実現したのである。そして、1991年に『パブリカ』の連載が『マリ・クレール』誌上で始まった。

興味深いことに、女性のファッションと文芸とをつなげて、女性のファッション文化を刷新することで売り上げを増加しようとする試みは、『マリ・クレール』に特有の企画ではなかった。吉見俊哉が『都市のドラマトウルギー』で明らかにしているように、女性向けファッション雑誌は、渋谷や、六本木、そして筒井が住んでいた原宿、表参道、青山近辺のユニークな文化の構築に貢献し、それぞれの場所を人気スポットにしていっ

たのである。吉見によれば、『アンアン』や『ノンノ』、『JJ』などの女性向けファッション誌が「街の特集を組み、原宿の『魅力』を各地の若者に示していった」ことで、少しずつ「どの路線を使い、どの雑誌を読み、どの番組を見ているか、といったことが社会関係の遠近を決定する要因となつた」（吉見、1997、307-308）。つまり、『マリ・クレール』は、単なる女性向けファッション誌でも文芸誌でもなく、女性ファッション誌がファッションという枠組みを超えていったなかで、ファッションと文芸とをつないだ、新たな文化産出の一つの表れなのである。

このように考えれば、『パブリカ』が筒井の短編集やSF雑誌にではなく、『マリ・クレール』に連載されたことには新たな意味が生じてくる。「くたばれPTA」と「女権国家の繁栄と崩壊」は、筒井康隆が経済的な余裕がなかった時に、そして渋谷・原宿文化が流行し始める1970年代という時代の前に、男性と想定される「読者諸君」を前提に執筆された短編である。一方、『パブリカ』は筒井が純文学を書き始めて作家として名が売れた後に、文芸に結びついたファッション文化を享受していた若い女性の読者を想定して執筆された作品である。このように考えれば、「くたばれPTA」と「女権国家の繁栄と崩壊」では、筒井が自身の経験に基づいた女性の自己イメージを吐露した作品であるのに対して、『パブリカ』では、筒井が若い女性たちに対して、自らが考える、あるべき女性の姿を描写することで、女性読者を「教育」しているといえよう。

では、筒井康隆にとってのあるべき女性の姿とはいかなるものだろうか。一旦パブリカの分析に戻り、この問題を検討しよう。まず注目したいのは、『パブリカ』では、女性の主人公である千葉敦子/パブリカが描かれているが、大きな役割を果たす他の女性登場人物は一人もいない。前節で述べたように、女性の集団化による権力関係の転覆可能性と筒井個人の経験とを考えれば、女性のあるべき姿とは、既存のジェンダー化された権力体制を揺るがさない強調された女性性を持っている女性であると思われる。この女性像は無論、作品内でも男性中心の権力構造を維持するかたちで登場する。第三節で行ったパブリカと能勢のやり取りの分析に再度注目しよう。能勢は、自分が話しやすいように態度や口調をうまく変化させるパブリカを「とびきり頭がいい」と思い高く評価するが、彼の評価はパブリカが男性社会の権力構造に異議を唱えず、その中でうまく振る舞うことに対する評価なのである。最後に、第3節で取り上げた、パブリカが能勢の夢を分析する場面に再度目を向けよう。能勢の男性性が、自らに内在する女性性と同性愛を意識することによって危機を迎えた時、パブリカは能勢の男性性を再度、確立させてやることでその危機感を解消していた。

『パブリカ』の出版社と女性ファッション誌を取りまく時代背景を考慮すれば、パブリカのように男性社会を維持することに貢献する女性とは、筒井康隆個人の理想的な女性像にとどまらず、男性の権力を維持する社会システムを維持すべく、雑誌メディアを消費する多くの女性たちに目指してほしいモデルとしても理解できる。筒井の理想的な女

性像とは、渋谷や原宿といった都市を歩く若い世代の女性が目指すべき、男性性を揺るがさない強調された女性性をもった女性なのである。

このように考えれば、筒井が理想とする女性性とは、女性性それ自体によって定義が明らかになるのではなく、男性性とジェンダーの権力構造の構成のみに貢献するかたちで作りあげられていることがわかる。本論文で取り上げた筒井の初期作品「女権国家の繁栄と崩壊」「くたばれ PTA」と『パプリカ』は、対照的な作品でありながらも、男性性の危機を中心に据えている点は共通している。われわれのジェンダー体制、とくに男性性が危機に晒されていなければ、筒井康隆はパプリカに窺えるような強調された女性性を描く必要はなかったであろう。ティム・エドワーズが男性性とは危機であると述べたように、男性性とは、ジェンダー体制における覇権的位置を正当化するために、永遠に活性化されねばならない危機に他ならない。

終わりに

本論文は、筒井康隆の初期作品「女権国家の繁栄と崩壊」「くたばれ PTA」と代表作の一つである『パプリカ』を取り上げ、作品に関連する筒井自身の男性としての経験と作品が執筆された社会状況を考慮することで、筒井作品と男性性との関係を明らかにした。本論文の冒頭で筆者は筒井が SF 作家の中でもジェンダーの観点から取り上げにくい作家であると述べたが、それは、星新一、小松左京、眉村卓といった日本 SF を代表する作家たちに比べて、女性性と男性性をはっきりと概念化しており、それらが作品に明確に表出されているからである。しかし、筒井の作品が、SF や純文学の業界の中で、人気作家としての地位を確かなものにしてきたということは、筒井康隆の作品で描写される男性性の危機感や男性性を脅かさない理想的な強調された女性性が、読者との書き手たちの既存のジェンダー観に共鳴していたことを示唆している。筒井のジェンダー観と SF や純文学の流通・生産・消費の領域との関係は考察する余地が十分にある問題であり、今後の研究課題としたい。

註

¹ 本論文でも取り上げる『パプリカ』の今敏による映画版の女性表象を分析した論文として L.

Angelica Cabrera Torrecilla, “Allegories of Japanese Women in *Paprika* by Tsutsui Yasutaka and Kon Satoshi,” *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, Vol 19, #3 (2019)がある。

² 1993 年、角川書店の高校国語教科書に掲載された筒井の「無人警察」(1973)における癲癇の描写が差別的であると日本てんかん協会に批判され、筒井は断筆を宣言した。

³ 原文の英語では、「強調された女性性」を *emphasized femininity* と呼ぶ。

参考文献

伊藤公雄、1996、『男性学入門』、作品社

Edwards, Tim. (2006). *Cultures of Masculinity*, Routledge.

小谷真理、1998、「若者でもなく、ご老体でもなく：筒井康隆『敵』、『すばる』

Kotani, Mari. (2002) Space, Body, and Aliens in Japanese Women's Science Fiction, *Science Fiction Studies*.

小谷野敦、2003、『反＝文芸評論：文学を遠く離れて』、新曜社

Connell, R.W. (1987). *Gender and Power*, Stanford University Press.

Connell, R.W. (2005). *Masculinities*, University of California Press.

レイウィン・コンネル、伊藤公雄（訳）、2022、『マスキュリニティーズ』、新曜社

渋谷知美、1997、『『フェミニスト男性研究』の視点と構想——日本の男性学および男性研究批判中心に』、『社会学評論』

清水良典、1997、「『虚構』の臨界点—筒井康隆を失った時代」、『文学界』

筒井康隆、1986、『くたばれPTA』、新潮社

筒井康隆、1993、『パブリカ』、新潮文庫

筒井康隆、1994、「女が逆セク・ハラに走るとき」『笑犬樓よりの眺望』、新潮社

Napier, Susan. (1996). *The Fantastic in Modern Japanese Literature*, Routledge.

平山亮、2019、「『男性性による抑圧』と『男性性からの解放』で終わらない男性性研究へ」、『女性学』

藤田直哉、2013、『虚構内存在：筒井康隆と「新しい《生》の次元」』、作品社

『マリ・クレール』、ウェブサイト「マリ・クレールとは」<https://marieclairejapon.com/about/>（2021年8月25日取得）

八橋一郎、1985、『評伝 筒井康隆』、新潮社

横尾和博、1994、『筒井康隆「断筆」の深層—断筆宣言：「言葉狩り」を許すな、擬制の自由社会を撃て』、星雲社

吉見俊哉、1997、『都市のドラマトゥルギー』、弘文堂